

教育課程研究指定校事業実施計画書（平成28年度）
－ 研究課題 1 高等学校－

都道府県・指定都市番号	11	都道府県・指定都市名	埼玉県
-------------	----	------------	-----

公立・私立・国立（○で囲む）

1 研究指定校の概要

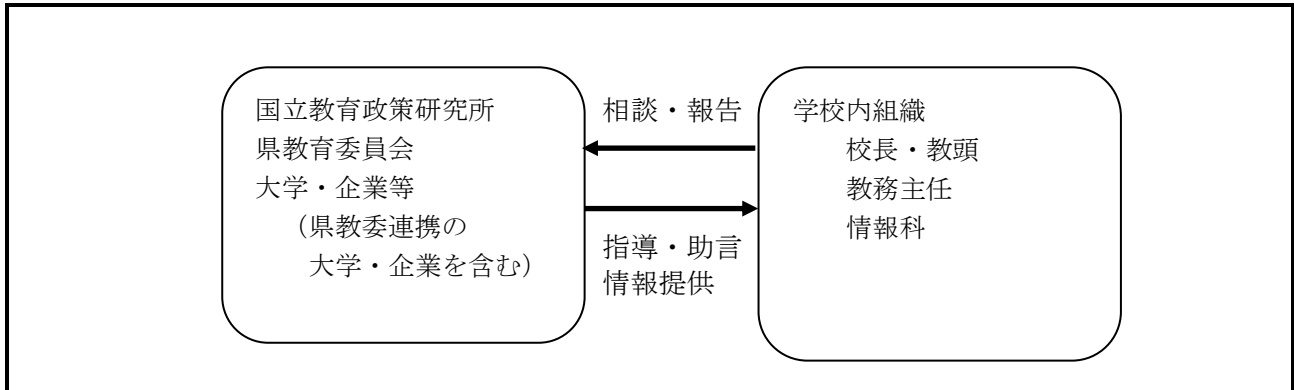
ふりがな 学校名	さいたまけんりつかわごえみなみこうとうがっこう 埼玉県立川越南高等学校		ふりがな 校長氏名	いいだ あつし 飯田 敦	
所在地	〒350-1162 埼玉県川越市南大塚1-21-1 電話 049-244-5223 FAX 049-240-1051 E-mail r445223@pref.saitama.lg.jp				
設置する 課程 (H28.4.1見込)	全日制		(H28.4.1見込。臨時的任用の者は常勤の者のみ含む) 教員数 68名		
生徒数 (H28.4.1見込)			[調査研究にかかわる教科等の教員数]		
学科名	1年	2年	3年	4年	計
普通科	368	365	367		1100
特記事項					

2 研究主題等

教科等名	情報（共通教科）	教科課題番号等	1
学校における研究主題	知識・技能を活用する問題解決型協働学習の指導法及び評価に関する研究		
研究主題設定の理由	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教科で学習した知識や技能を習得するだけでなく、「どのように使うか」という思考力・判断力・表現力の育成は、本校だけではなく、全国的に課題となっている。 ○ 問題解決を行うには、一つの教科内の知識を使うだけではなく教科横断的な知識・技能が必要になってくる。特に、情報科で学習する「モデル化とシミュレーション」の單元においては、他教科の題材が数多く見られる。このことから、情報科で学習する「数式モデル」の考え方は、他教科の学習の理解を深めることにも有用であると考えられる。 ○ また、汎用的な能力として、コミュニケーション・コラボレーションの能力や、ICTリテラシーなどの育成も喫緊の課題となっている。このような能力の育成には問題解決型学習や協働型学習が有用である。 ○ 知識・技能とともに思考力・判断力・表現力や汎用的な能力の育成を図るには、ペーパーテストだけではなく多様な評価方法の開発が不可欠である。大学入学希望者学力評価テスト（仮称）では記述式の問題による評価が検討されていたり、アクティブ・ラーニングの評価法としてパフォーマンス評価やポートフォリオ評価などの議論も行われていたりしている。しかし、現状では、このような評価方法を用いた実践事例は、あまり多く報告されていないので、今後アクティブ・ラーニングによる学習の評価方法として普及を図る必要がある。 ○ そこで、本研究では知識・技能を活用して行う問題解決型協働学習の指導と、その評価を効果的に行うことを目標に研究主題を設定した。 		

研究の内容	1 問題解決型協働学習の指導法の研究 2 多様な評価法についての研究 3 問題解決型協働学習の実施 4 問題解決型協働学習の評価
-------	---

3 研究体制等



4 研究計画

	実施時期	研究内容, 研究方法, 成果の公開等	期待される成果等
一 年 次	4月 ～6月	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決型協働学習の指導法についての研究 多様な評価法についての研究 Webページでの成果発信の準備 	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決型協働学習の指導力の向上 問題解決型協働学習の効果的な評価 校外へ向けての情報発信及び意見聴取
	7月 ～9月	<ul style="list-style-type: none"> 事前評価 	<ul style="list-style-type: none"> 授業実践前における生徒の能力の測定による現状把握
	8月	<ul style="list-style-type: none"> 全国高等学校情報教育研究会全国大会(神奈川大会)での発表 	<ul style="list-style-type: none"> 研究の途中段階での成果の報告及び参加者からの研究に対する意見聴取
	10月 ～12月	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決型協働学習の授業実践(研究授業・研究協議を含む) 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の思考力・判断力・表現力や汎用的な能力の育成。研究成果の発信、外部からの意見聴取
	12月 ～3月	<ul style="list-style-type: none"> 事後評価 一年次の検証および次年度に向けての検討 	<ul style="list-style-type: none"> 授業による生徒の変容の測定 授業法の効果の測定 二年次に向けて、研究の在り方に対する評価・改善
通年	<ul style="list-style-type: none"> Webページでの発信、研究会・学会等での発表 	<ul style="list-style-type: none"> 研究途中での成果の報告及び研究に対する意見聴取 	

二 年 次	4月 ～6月	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決型協働学習の指導法についての検討 ・多様な評価法についての検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導法や評価法についての改善
	7月 ～9月	<ul style="list-style-type: none"> ・事前評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業実践前における生徒の能力の測定による現状把握
	8月	<ul style="list-style-type: none"> ・全国高等学校情報教育研究会全国大会(東京大会)での発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の途中段階での成果の報告及び参加者からの研究に対する意見聴取
	10月 ～12月	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決型協働学習の授業実践(研究授業・研究協議を含む) 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の思考力・判断力・表現力や汎用的能力の育成。研究成果の発信、外部からの意見聴取
	12月 ～2月 通年	<ul style="list-style-type: none"> ・事後評価 ・二年間の検証 ・Webページでの発信、研究会・学会等での発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業による生徒の変容の測定 ・研究に対する評価 ・研究途中での成果の報告及び研究に対する意見聴取

5 研究のまとめの見通し

- 一斉授業で学習した知識・技能を、活用型授業によりどのように展開すればよいか、問題解決型協働学習を行う上での要件を明確にすることにより、問題解決型協働学習の授業設計をすることができる。
- 従来のポートフォリオでは、生徒の変容を記録し把握することが難しい。ポートフォリオの活用方法を確立することにより、生徒の変容の把握を教師の負担感なく行うことができる。
- 問題解決型協働学習を行うためには、すでに学んだ知識・技能を自ら意識して活用する必要がある。その活動が、学習したことの振り返りや新たな疑問を持つきっかけとなる。こうして、深い学びにつながる活動を授業内で誘発することができる。
- 問題解決型協働学習などの生徒の主体的・協働的な学習活動を含めた授業設計を行うことにより、生徒の思考力・判断力・表現力を向上させることができる。
- 評価方法を見直し「何を知っているか、何ができるか」、「知っていること・できることをどう使うか」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の3つの観点により評価を行うことで、次の指導につながる評価方法(指導と評価の一体化)を確立ができる。
- ポートフォリオ評価の方法を確立することにより、エビデンスを活用した指導と評価を行うことができる。
- 生徒自身が自己の変容を振り返ることにより、自己肯定感や有用感を感じることができるようになる。